「小動物の飼育を通して豊かな心を育む」

佐藤　暁子

１　はじめに

平成１６年度の修了式が近づき、子どもたちの３年間の幼稚園生活が終わろうとしている。年長組とのお別れ遠足に多摩動物園に行き、ライオンバスに乗ったり、親子のゾウが遊ぶ様子を見たり、昆虫館でひと足早い春に出会い、心ゆくまで小動物との触れ合いを楽しんできた。そして年長組は、修了記念作品として、楽しかったお別れ遠足の思い出を友達と一緒に大きなパネルに描き幼稚園に登ってくる坂に展示することにした。ライオンが自分たちの乗っているバスの所にやって来て朝御飯の肉を食べたところや、キリンが高い木のところに吊るされた籠のなかから、皆で草を食べていた場面、子どもたちが歌うぞうさんの歌に合わせてゾウが親子でお尻を振ってゆらゆらと楽しそうに踊ってくれた場面などが、実に楽しそうにいきいきと描かれた。自分たちで大きな画用紙に下書きをし、どんな場面を書こうかと相談しながら作業を進めていく子どもたちの表情は、心から動物を愛する優しさや、より深く表現したいという感性や探究心にあふれていた。

私は、子どもたちが幼稚園生活の集大成のこの時期に、動物園に行き、こんなにも身近に動物との触れ合いを楽しみ、親しみや自然界の厳しさや偉大さを感じ取れる機会に出会えたことに感謝するとともに、子どもたちにとって３年間の幼稚園生活の中での小動物との触れ合いを通して育ってきた感性や心の豊かさ、本物体験によって心が耕されていく過程の大切さを再認識した。毎朝、登園する道々に飾られた１０枚の動物の絵は、子どもたちの心からのメッセージであると感じている。

幼稚園は、学校教育法に位置づけられた生涯教育のなかでの初めての学びの場である。子どもたちは「教科書や楽譜」を見ながらの学習ではなく様々な環境に心が揺り動かされ「おもしろそう！なんだろう！僕もやってみたい！おしえて！もっとやりたいな！」など、子どもの興味関心からスタートし、知的好奇心をもって取り組みながら、試行錯誤を繰り返し、様々な事に気付いていく。そして次への自己課題を見つけながら取り組んでいく。しかもそれは机上だけで行なわれるのではなく、遊びのなかで、遊びを通して行なわれていくのであるから、どんどん面白くなり夢中になって取り組み、多くの学習をしていく。豊かな心や感性もその中で育まれていくのである。

２　本園の実践から

本園はＪＲ高田馬場駅から徒歩１０分程の所に位置し、地域は築５５年経過した都営住宅の建て替えの時期に当たり、新しい街作りの為あちこちで道路工事や建築工事が行われている。西戸山地域には、幼稚園１、小学校１、中学校２保育園、高齢者センター、社会教育会館などがあり地域のネットワークを活かして互恵性のある交流が図られている。子どもたちは、殆どが高層住宅から通園しており家庭で小動物等生き物を飼育することは可能ではない。そこで、幼稚園では家庭で体験できない「小動物の飼育」を通して、豊かな心を育てていきたいと考え、教育課程に位置づけて様々な工夫・改善を行っている。

《生き物との出会いの中で育てたいこと》

新宿の街中にある本園では、子どもたちが家で飼うことのできない小動物をたくさん飼っている。季節の巡りとともにやって来る生き物、年間を通して生活している生き物、地域の方から頼まれて仲間入りした生き物等が、子どもたちと共に生活している。ウサギ、モルモット、ハムスター、小鳥、カメ、金魚、夕方になると白鷺が池に遊びにやって来る。毎年、春になるとたくさんの蛙のペアが冬眠から覚めて池に帰ってきては沢山の卵を産み、４月に新入園児が幼稚園に入るころには、オタマジャクシでいっぱいになる。年長児たちがオタマジャクシをいろいろな容器ですくう様子を見て自分たちもオタマジャクシ取りを楽しむ姿が見られる。お母さんと離れられなくて泣いていた年少組がオタマジャクシ取りが大好きになり、オタマジャクシ取りをするために幼稚園に喜んでやって来るようになった事もある。ウサギと遊びたくて、幼稚園にやって来る子どももいる。初めての幼稚園生活のなかで、子どもたちは存分に生き物と触れ合いながら、様々な自然の摂理を学んだり、気づいたり、生命の誕生に触れて喜んだり、命の終わりに立ち会い、驚いたり悲しんだり・・・。生き物との触れ合いのなかで沢山の感情

体験や感動体験をしている。

幼児期の子どもたちは、教科書や図鑑を見て学ぶのではなく、実に様々な自然界の事実に学んでいるのである。毎朝、レタスやりんごの皮、にんじん等を大事そうにビニール袋に入れて登園する子、ウサギやモルモットに餌をあげながら、話しかけたり、心を癒している子、まさに自分たちの仲間として付き合っているのである。心温かな生物との触れ合いのなかで「命の大切さ」や「優しさや思いやりの心」を育んでいきたいと願っている。

(1) 戸塚警察に捨てられていた「ウサギのプリン」～地域の警察、家庭との連携～

「警察署の駐車場に３羽のうさぎがケースに入れられ、餌と一緒に捨てられていたので幼稚園で飼ってほしい。」と連絡がある。職員と相談して１羽だけ貰うことにする。大きくなって家庭では飼えなくなって誰かに飼ってもらいたくて捨てたのだろう。子どもたちに話すと、「幼稚園で飼おうよ。」ということになる。可愛がってもらっていたらしく穏やかで人懐っこいウサギである。子どもたちはプリンという名前を付け、家から野菜をもってきて食べさせたり、ケースをきれいに洗ったりしながら世話をしている。「明日のプリンちゃんのご飯は人参にしよう。」「そのリンゴの皮ちょうだい。明日プリンにあげるから。」子どもたちにとって捨てられていたという事実はどのように映っているのだろう。声をかけながら世話をしている姿のなかに小さい仲間への優しさや思いやりの気持ちが感じられる。私たち大人は、長い見通しのなかで生き物を飼い、命の終わりまでをしっかりと見取る覚悟で育てていかなければ、子どもたちに「生命の大切さ」を教えることはできないと痛感する。

(2) モルモットの赤ちゃんが生まれたよ！～生命の誕生をみんなで喜ぶ～

娘の勤務する幼稚園から、赤ちゃんモルモットの雄と雌を一羽ずついただいてきた。今までに居たモルモットと仲良しで、いつも一緒に遊ばせていた。子どもたちが毎日モルモットのお世話をしていたところ「先生、クロちゃん太ってきたね。赤ちゃんが居るのかな？」と誰ともなく言いだした。どうもおめでたらしい。子どもたちに「生命の誕生」の場面を見せてあげたいと考え、モルモット当番が世話をするときに、クロちゃんの様子を念入りに見ることにする。冬場なので、いつもの新聞紙のほかに柔らかい布切れ等をいれておき夜中に冷えないようにしておく。２月１１日、出産！建国記念日で幼稚園はお休みのため、１２日の朝、出産したことを知る。母親が神経質になっているので静かな部屋に隔離し、赤ちゃんの様子などをビデオに写して、子どもたちに伝えるようにする。クロちゃん出産のニュースは、家族や小学生のお兄さん、お姉さんまであっと言う間に流れ、放課後、幼稚園に見に来る子まで現れる。数日後、いよいよ赤ちゃんを見せる日となる。まずは毎日世話をしていた年長組から。子どもたちは、真剣な表情でその瞬間を心待ちにする。赤ちゃんがお母さんの胸元から４羽、ちょこちょこと出てくると、「わー、かわいい！」「ちいさーい！」幸せそうな優しい感激の声が口々に沸いて出てくる。「この子の模様はお父さんに似てる。この子はお母さんと同じ模様だ。」「ほんとだ、この子もお父さんと同じ模様だ。赤ちゃんなのに走ってる。おっかけっこしてる。」「抱っこしたい。」気付いたことを言ったり、触りたくなったり・・・。教師が「抱っこするのはちょっと待って、人間の匂いがするとお母さんがおっぱいをくれなくなるんだって！」「なんで？」「赤ちゃんおっぱいがご飯だから、もらえないとかわいそう！」「じゃあ、野菜が食べられるようになるまで抱っこはしないで、見ててあげよう！」自分たちで言い合いながら、いとおしそうに赤ちゃんを見ていた。子どもたちは家庭で赤ちゃんのことを話題にするので未就園児の弟や妹までが野菜をもって会いにやってくる。幼稚園中がクロちゃんの赤ちゃん誕生で幸せな気分に浸ることができた。年長組は、今までより一層張り切って掃除や世話をするようになった。生まれた赤ちゃんを入れて８羽の大所帯になったため、餌代や世話の範囲を考え、今後の方向として、都内の幼稚園のネットワークを活かして欲しい所へあげるようにしていこうということになる。子どもたちとも話し合い、納得したところで他区の幼稚園に貰われていくことになる。

(3) 園として、飼育環境をどの様に考えるか～ジャンガリアンの事故、鳥インフルエンザ～

生き物を飼う事により「生命の誕生」に立ち会う幸せを実感することもあるが、「生命の終わり」に直面することもある。園の近くに動物病院があり、小鳥からウサギにいたるまで病気になると子どもと一緒に連れていき、見てもらうことがある。薬をいただいて３時間おきにスポイトで薬を飲ませたり等、命のあるものへの対応は人間と変わらない。核家族、少子化が進み身近に「生命の大切さ」を実感する機会の少ない子どもたちにとっては、貴重な体験の場である。お墓を作って「はい、おしまい」ではなく生命の神秘や尊厳、命を全うする大切さなどを幼児なりに知らせていきたいと考える。新聞紙上を賑わせた鳥インフルエンザやジャンガリアンによる死亡事故についても真剣に受け止め、園として何を大事にしていくかをしっかりと考えながら、安全面、清潔面等を配慮した飼育のあり方を考え指導していくことが大切である。

(4) 家庭・地域への情報発信とネットワーク作り

毎月の園だよりで、子どもたちと生き物との触れ

合いのエビソード等を保護者や地域に知らせていくことで、子どもたちと生き物の触れ合いの意義や、その中で「豊かな心」が育っていく姿を理解してもらうとともに、良き協力者、理解者、親子飼育の参加者になってもらう。子どもたちは、幼稚園と家庭、地域の連続性、循環性のある生活の中で育っている。園からの情報発信でネットワークが拡がり、家族や地域ぐるみの飼育活動が行なわれていくよう工夫する。

＜４月の園だよりから・巻頭言より＞

「六つになった」Ａ・Ａミルン作

一つのときは，なにもかもはじめてだった
二つのときは，ぼくは
　　まるっきりしんまいだった
三つのときは，ぼくはやっとぼくになった
四つのとき，ぼくはおおきくなりたかった
五つのときはなにからなにまで
　　おもしろかった
今は六つで，ぼくは
　　ありったけおりこうです。
だからいつまでも六つでいたいと
　　ぼくはおもいます。

「くまのぷーさん」の作者であるＡ。Ａミルンの詩集のなかに、こんなに可愛い詩があるのをご存じですか。読めば読むほど子どもたちがいとおしく、抱きしめてあげたくなる詩ですね。大きく大きくなりたいと願っている子どもたちといつまでもかわいい存在でいてほしいと願っている母親・・。一人の人間として勇気をもって、たくましく船出をしていく子どもたちのために母親は母港となって、いつでも帰ってこれる場所を作ってあげることが大切ですね。あせらず、あわてず、心温かく！幼稚園は子どもたちが冒険にやって来る所。アンテナを張って情報をキャッチし力いっぱい自分らしさを出しながら人や物との触れ合いを通して様々な感動体験や感情体験を繰り返し豊かな心や体の育ちを目指していく場であると考えています。毎日の遊びのなかで、子供たちの素晴らしい光景に出会うことがあります。

☆ウサギとのかかわりから

入園当初は、生きているウサギとぬいぐるみのウサギの区別がつかず、可愛さのあまりギュッと抱きしめてみたり、自分の餌を食べてくれないと押さえつけて食べさせようとしたり、砂を頭からかけたり等ウサギ受難の日々でした。教師が楽しそうに話かけたり可愛がったりし、「ウサギさ８ん優しくしてくれるとうれしいんだよね。」「ギュッとすると苦しくて嫌だよね」とウサギの気持ちを代弁したりしているうちに、子どもたちもだんだん扱いに慣れてきて、すっかりすてきな仲間になりました。キャベツやニンジンを持ってきて食べさせるのを日課にしている子。「ウサギ可愛いね」と顔をくしゃくしゃにしてうれしそうに話す子、抱っこは出来ないけれど楽しそうにウサギの仕草を見ている子など様々な姿が見られます。小さな生き物にも大切な命があること。そして愛情をもって接すれば相手も親しみをもって接してくることをウサギから感じ取ってほしいなと考えています。

もうすこしすると、Ａ小学校で生まれたウサギの赤ちゃんをいただくことになっています。登降園の親子の会話のなかに、ウサギの赤ちゃんのこともきっと出てくることでしょう。感受性の豊かな吸収力のある子どもたちに、素晴らしい日々をプレゼントしたいですね。（巻頭言より）

毎月出される園だよりの巻頭言には、子どもたちの日常生活のなかで育っていく姿をできるだけ具体的に伝え、親子の登降園の話題となるように配慮している。幼稚園生活を通して、園と家庭とが互いの力を合わせて「教育・共育・響育」していくことが望ましいと考える。

(5)長期休業中の親子当番活動

前述のように、幼稚園での生き物とのかかわりの様子を園便りや降園時の会話などで知らせていくことで、保護者、地域、幼稚園の共通の話題になり、地域のネットワークのなかで多くの情報が行き交うようになってくる。春、夏、冬の休み中の生き物のことも子どもたちや保護者の話題となる。みんなが居ない時のお世話をどうするかということで話し合い、親子で幼稚園に遊びにきて、順番に世話をすることになる。休みの前に空白のカレンダーに都合のいい日を書き込み、みんなで調整して各クラスから親子当番をだし、他のクラスの親子と一緒に世話をすることになった。日直の教員と一緒に花や野菜の水やりや収穫をしたり、飼育物の世話をお母さんと一緒にする。始めは戸惑い気味の保護者も、子どもたちが教えてくれたり、当番のやり方を書いた表示物を見ることで理解し、他の親子とお喋りを楽しみながら生き物の親子当番に取り組んでいる。何

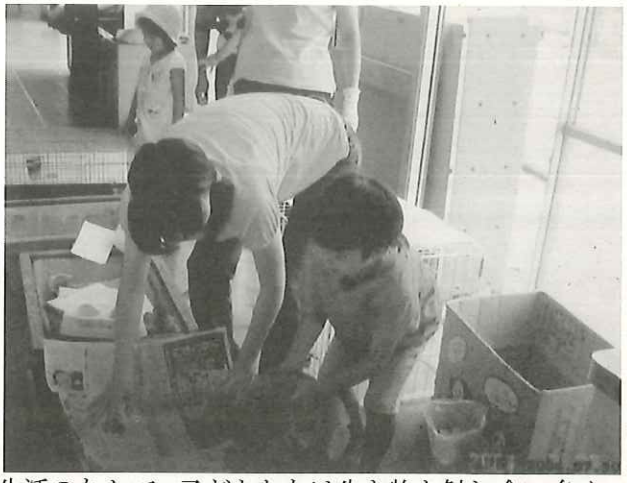
よりも、子どもたちが生き物と楽しそうに関わったり、小さな手で世話をする様子をみて、子どもと生き物の心の通った関係を感じ取ることができるのであろう。また、ハムスターやモルモットなどの小さな生き物は、家庭にホームステイを希望する家庭もある。それぞれが一番無理のない、子どもにとって望ましい方法で、親子当番に取り組んでいる。休み中の教員とのかかわりや他の友達と一緒に学年を越えて遊ぶ様子は、実に楽しそうである。

(6)生き物との触れ合いから育つ心

私は新規採用で幼稚園に就職したとき、４０人の子どもたちの保育に精一杯で、保育室の金魚を見たりする心の余裕が全くなかった。ただ、部屋にいる生き物として「死なないように餌をあげ死なないように水を替え・・・」ところがある日の午後、保育室に猫がやって来て金魚が今にも取られそうな場面に出会った。私は必死で猫を追い出した。そして何もできない金魚が可哀相で不憫だという気持ちと、私が金魚を守らなければという強い気持ちが生まれた。それからは毎朝、保育室の窓を開けにいく時に「お早う！」と声を掛け親しみを持つようになった。そのころを思い出してみると、4歳児４０人のなかには、「金魚」を見てほっとしている子や、心が癒されている子もいたことだろう。今、３５年がたち、多くの子どもたちとの出会いのなかで、生き物との触れ合いがどれだけ子どもの心にやさしさと潤いをもたらしてくれていたかを感じている。『乳幼児期の子どもは、親から愛のこもった笑顔を向けられると笑顔をもってそれに応え、親を幸せな気持ちにする。そしてさらに親の笑顔を引き出し、またそれに子どもが笑顔で応えるという相互作用的関係のなかで、親と子どもの親密な関係が成立していく。子どもたちの健全な育ちを保証するために様々な場面や事象の中での相互作用的関係をもつことが大切である』生き物と人間（子ども）との関係もまったく同じことが言えるのではないかと考える。親しみをもって関わってくれる子どもたちに、生き物は自然体で、無邪気に関わってくる。子どもの声や気配がするだけで嬉しそうに出迎えてくれる。幼いころに生き物と関わることの意味がここにあると考える。

3　おわりに

幼児は、いつも心の中に感性と好奇心の鋭いアンテナをもっている。幼児同士の何気ない会話や教師とのかかわり、自然体験や感動体験が幼児の心を揺さぶり、より意欲的な行動へと結び付いていく。「自然は語りかけると必ず応えてくれる」幼児期の様々な体験や生き物との触れ合いが、子どもたちの心を耕し、みずみずしい感性と豊かな心が育っていくことを願って努力を続けていきたい。３年間の幼稚園



生活のなかで、子どもたちは生き物と触れ合い多くの学習をする事ができた。

① 可愛がっていた生き物の「生命の誕生と別れ」を経験して、命の大切さ、誕生の喜び、命の終わりの悲しさを感じることができた。

② 「人も生き物も共に生きている」お腹がすくのも、悲しいのも、痛いのも、お家が汚いのはいやなのもみんな一緒⇒みんなで世話をしよう！

③ 毎日関心をもって世話をすることで、小さな変化にも気づき、病気やおめでたを発見する。

④ 実際に育ててみることで、生き物の生態や飼育の仕方などに関心をもって図鑑を見るようになり興味や関心の範囲が拡がっていく⇒幼稚園で飼っているカイコの餌をお父さんと一緒に高尾山に取りに行き、継続して関心をもち続ける。

⑤ 生き物は綺麗で清潔なところが好きだということが感じられるようになり、糞の片付けや掃除も積極的に取り組むようになる。

⑥ アトピー体質など直接生き物に触れられない子どもも、心の参加は出きることを知らせたところ、親子で毎朝野菜を持ってきてくれるようになり、小鳥が大好きになった。

⑦ 教師は、子どもと生き物とが触れ合う姿から、環境面の配慮や一人一人の幼児理解、幼児に適した飼育物について学ぶことができた。

１年に一回、動物を園に大量に来てもらって触れ合わせる「一日動物体験」よりも、家庭でできない生き物との触れ合いを幼稚園で日々体験していくことの大切さを実感している。幼稚園、家庭、地域のネットワークを最大限に活かして、子どもたちに豊かな心を育んで**いきたい。**

（新宿区立西戸山幼稚園　園長）